

有限資源から価値を生み出す 松田産業の挑戦

有限資源は決して無駄にはしないという信念のもとに創業された松田産業は、貴金属の回収、食料供給の確保、そして見過ごされがちな価値を磨き上げることで、持続的な強さを築くグローバル企業へと成長してきた。同社の長年の理念は、いまや資源意識の高まる世界のニーズに答えている

By Daniel de Bomford, Bernard Thompson and Cian O'Neill

松田産業は、技術へのこだわりと長期的視点を持って築き上げられてきた。価値あるものは決して無駄にせず、大切に育てたものは、長い将来にわたって持続的な力になる。——創業以来、その思想を体現してきた。1935年以来、同社は「有限資源は大切に、有効に使われるべきである。企業は利益だけでなく社会への貢献を通じて価値を創造すべきだ」というシンプルな考え方を受け継いできた。長い年月をかけて、この倫理観は貴金属と食品という二つの異なる業界が密接に関連する分野で形を成し、ほか



松田産業の多彩な貴金属製品

の企業が限界しか見いださない場面でも、同社は価値を回収し、有用性を取り戻し、レジリエンスを構築する能力を発揮してきた。

現在、松田産業は広範な国際展開を行う総合企業へと成長している。その資源循環の歴史は1948年にさかのぼる。当時、地元のマヨネーズ工場にて不用とされていた卵白を蒲鉾

メーカーへ供給したことが始まりだった。そして1951年には、印刷工程から回収した銀を精製する事業を開始し、「もったいない」の精神、すなわち無駄なく生きるという考え方を体現した現在の企業形態を築いた。同社は、産業の周縁で活動するニッチなリサイクル企業ではない。長年培ってきた哲学を、現代の製造業と食品市場を支える大規模ビジネスへと転換した多角化企業である。

同社の特徴の一つはその事業構造だ。松田産業は貴金属と食品という二つの主要事業セグメントで運営されている。一見するとこの組み合わせは独特に見えるが、実際には同じ運営思想に基づいている。ひとつは高度な技術精度で貴重な素材を回収・精製・供給する事業。もうひとつは、信頼と継続性が重視される分野において、調達・品質保証・安定供給を重視する事業である。この二つが組み合わせることで、同社は単

「私自身が何より大切にしているのは、“お客様第一”と“人を大切にすること”の二つです。」

松田産業株式会社 代表取締役社長
松田芳明

 **松田産業株式会社**
MATSUDA SANGYO CO.,LTD.

www.matsuda-sangyo.co.jp/en

なる企業アイデンティティを確立している。

重要部品を支える貴金属事業

貴金属事業は同社の中心的存在である。松田産業はこの事業を単なるリサイクルと捉えておらず、回収・精製・分析・化学品・加工品・クローズドループソリューションに至る総合的な資源循環プラットフォームとして位置づけている。同社は生産



松田産業の食品原料イメージ

工程の末端で廃棄物を扱う企業ではない。電子デバイスメーカーの生産プロセスから発生する廃棄物から貴金属を回収



し、再び工業用途へと、厳しい基準を満たす形で戻している。

これは、純度がすべてと言える半導体や電子部品などの分野において特に重要になる。松田社長のインタビューで最も強く響くテーマのひとつは、リサイクル金属は採掘された鉱石より劣るという過去の思い込みを、同社が長年にわたり乗り越えてきたという点だ。「数十年の精製技術の蓄積により、新たに採掘された鉱石から得られるものと同等、あるいはそれ以上の純度レベルを

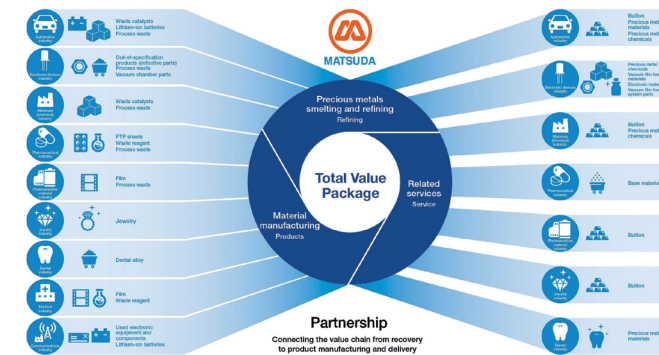


松田産業の貴金属インゴット

達成できる技術を開発してきました」と松田氏は語る。

この品質こそが、松田産業がサーキュラーエコノミーで重要な役割を果たす理由である。半導体等の高度な製造業において、リサイクル金属は採掘された鉱石と同等に性能を発揮して初めて意味を持つ。松田氏によれば、まさにそのハードルこそが、同社が乗り越えてきた課題なのだ。

「30年近くにわたり、採掘さ



貴金属事業セグメント概要

れた金属よりも低い不純物レベルまで検出・除去できる分析・精製システムを構築してきました」と松田氏は続ける。製造業者は従来、リサイクル金属が複数の出所を持つことから品質の一貫性を懸念してきた。同社は分析能力と不純物管理

TCFD TASK FORCE ON CLIMATE-RELATED FINANCIAL DISCLOSURES
Supporting the TCFD recommendations

への継続的な投資により、この弱点を強みに変えた。結果として、めっき液や蒸着材などの貴金属製品は、半導体や電子部品など最高水準の信頼性が求められる用途でも使用できる品質に達している。

脱炭素・サプライチェーン安全保障・サーキュラーエコノミー

松田産業の存在感は、単なるリサイクルを超えている。同社は脱炭素、循環性、安全保障、そして半導体材料の戦略的重要性という複数の産業トレンドの交点に位置している。同社の事業戦略は、精製能力、クローズドループソリューション、認証を受けたリサイクルゴールド製品など、技術だけでなくトレーサビリティや環境性能を重視する市場ニーズに正面から応えている。

松田氏はまた、同社の強みを日本の産業構造の文脈にも位置づける。「日本は世界でも最も効率的なリサイクル国家の一つです」と語り、その背景

には産業構造があると説明した。鉄鋼、銅製錬、セメントなどの産業がコンパクトな地域に集中しており、廃材が捨てられるのではなく、別の産業の原料として循環する。この産業クラスター化こそが日本のリサイクル発展の実務的基盤となった。

ただし、松田氏はリサイクルを過度に美化することはしない。リサイクルにも環境負荷はあり、その効果は原料の分別精度と処理の効率に大きく依存する。「事前にどれだけ正確に分別できるかで、高温処理への依存度が変わります。前処理技術の進化が進めば、環境負荷を最小限に抑えながら効率的な精製が可能になります」と語る。



気候変動質問書「CDP Aリスト」に2年連続選定

この発言は、同社のサステナビリティへの取り組みが抽象的な理念ではなく、工学的な実践に根ざしていることを示す。

同社はその姿勢を証明する取り組みも進めている。100%リサイクルゴールドを使用したECOシリーズはUL Japanの認証を取得しており、脱炭素目標の設定や気候関連の取り組み

でも外部評価を得ている。これらは単なるマーケティングのためではなく、同社の産業的価値を裏付ける具体的な証拠と言える。

食品事業で「食の循環」を支える

貴金属事業が同社の技術的アイデンティティを示す一方、食品事業は企業DNAの連続性を示す。食品事業の原点について松田氏は、あまりに出来すぎた話のようだと言及しつつ、同社を象徴するエピソードとして紹介した。「当時、隣の会社がマヨネーズを製造しており、卵黄だけを使っていた。不用とされていた卵白を祖父が無料で引き取り、かまぼこ業者に販売したのです。原料が無料だったため利益が出て、それが当社の食品事業の始まりでした。」

これは起業家精神の物語であると同時に、物の見方の物語でもある。廃棄物ではなく資源として捉える姿勢は、貴金属事業にも食品事業にも共通する本質的な思想だ。

小さなサイドビジネスとして



DRIVING AMBITIOUS CORPORATE CLIMATE ACTION
Emissions reduction targets approved by SBTi

始まったこの事業は、今や世界規模の主要事業へと成長した。現在、松田産業の食品事業は水産物、野菜、肉、卵を世界中から調達し、品質保証、トレーサビリティ、安定供給を重視している。サプライショックや感染症、輸送混乱が起こりやすい現代において、この能力は大きな戦略的価値を持つ。

「どこからでも代替供給を確保できることが当社の強みです」と松田氏は語る。

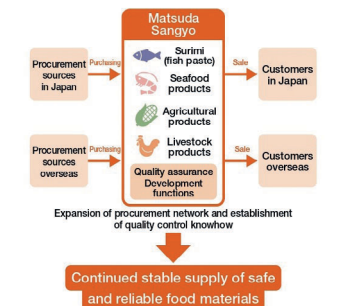
鳥インフルエンザによる卵不足のように、国内生産が数ヶ月から数年にわたり回復しないケースでは、同社の国際調達ネットワークが顧客の信頼に

つながる。

また、「品質保証とトレーサビリティの体制も非常に強固です。どんな問題が発生しても、原料段階まで即座に遡及できる仕組みを構築しています」と説明する。これは、複雑な流通経路を持つ冷凍食品や加工品にとって不可欠な能力であり、貴金属でも食品でも「品質と安定供給」で責任を果たすという同社の姿勢を示している。

「循環」と「信頼」で未来へ

この二つの事業が併存していることには、大きな意味がある。松田産業は流行の概念で組織された会社ではない。共通する「規律」に基づいているのだ。貴金属でも食品でも、同社は回収・調達・精製／加工・



食品事業セグメント概要

検証・供給という一連のプロセスを確立している。だからこそ、この二つの事業は偶然ではなく必然として結びついている。どちらも、資源が限られ不確実性が高まる市場をよりよく機能させるための仕組みづくりなのだ。

有限資源、クリーンな生産、供給レジリエンスが重視される現代において、松田産業の長い進化の歴史は、過去の逸話ではなく実践的なモデルとして映る。銀の回収と卵白の再利用から始まった同社は、循環・精度・信頼を基盤とする現代企業へと発展した。これは、これからの時代にも有用性を保ち続けるための、非常に説得力のある姿である。